

## 聞きまづがい

——日本語雑記・九——

工藤力男

聞きまづがい

向田邦子の随筆には聞きまづがいの話がいくつもある。著者自身の「春高樓の花の宴 眠る盃影さして」のほか、「二列ランパン破裂して」「童は見たり 夜中の薔薇」などである。すべてが類音というわけではなく、幼くて歌詞の意味がわからずに誤解したものもある。

音声学者・杉藤美代子さんの姓はスギトウであるが、この文字列を初めてみた人がスギフジと読むのは無理もない。その杉藤さんの論文「柴田さんと今田さん——語音とアクセントの関連——」（引用は和泉書院刊『日本語音声の研究』6による）の冒頭に、病院の待合室での経験が書いてある。

自身が呼ばれたと思ったならそれは誤りで、「辻内さん」だったという。スギフジとツジウチではずいぶん違うように思うが、著者によると、「sugifudzi」と「tsujuchi」は母音の排列が同じで、第二三拍の子音の調音位置が近く、東京方言話者である著者のアクセントは同一なのだという。

昨秋上京したさい、埼玉県の友人と会うことになり、その前夜、待ち合わせの場所と時刻について電話で話した。かれは「川口駅前にあるリ\*アホールの前」を指定した。星印の箇所をわたしは「ジ」と聞きとった。横文字らしいのだが不安で、「ギ」かもしれない、あるいは「リ」かなと迷いながら、いずれにせよ耳なれないことばだ、鑄物の

ことかとも思った。わたしは毫碌人間であるが、耳だけは割にいいつもりなので、公衆電話の性能のせいにして翌日そこに赴いた。正解は川口綜合文化センター「リリアホール」、昭和四十一年の国民体育大会開催を機に制定した市の花、鉄砲ゆりに由来する名であった。

それで思いあたることがあった。昨年であったか、ラジオFM放送の「パロックの森」で紹介される演奏家集団の名「バッハ・コレウム・ジャパン」が、初めはよく聞きとれなかった。リ・ジ・ギのいずれにも聞こえたのだ。カレッジと関わるようなので、ギかなとは思っていた。辞書によると、やはりラテン語のコレギウムであった。

二月のことである。ある集まりで京菓子が出たとき、京都の「セイリョウ歓喜団」という菓子が話題に登った。風変わりな名である。その話を提供した人によると、清涼殿の清涼だと思ふという。インターネットで「セイリョウ歓喜団」を検索すると六千余件あり、筆頭は「清涼」ならぬ「清浄」であった。清涼もあるが清浄が圧倒的に多く、当の菓子の製造元のホームページには「清浄歓喜団」とある。ジとリが入れかわっているのだ。

右の諸例は、わたしがたまたま経験した、リ・ジ・ギの

音の聞こえに関わる話である。言いまちがいに関する著書や論文はいろいろあるし、同音語もよく扱われる。だが、聞きまちがいは失敗談にはなるが、児童の言語獲得、方言の記述などに偏り、ともに論ぜられることが少ない。わたしは音声学に疎く、この分野の近年の研究状況にも暗い。失考の恐れ大ありだが、従来あまり言及されなかったことを取りあげ、日本語のありかたについても考えてみたい。

糸井重里さんのホームページ「ほぼ日刊イトイ新聞」に寄せられたものをまとめた『言いまちがい』（東京糸井重里事務所 2004）には、言いまちがいの実例一千件ほどが集めてある。それを読むと、言いまちがいが聞きまちがいによるばあいも多いことがよくわかる。糸井流にいうと、言いまちがいは聞きまちがいでもあるのだ。本稿では、自身の聞きまちがい体験を中心に具体的に記述し、日本語音韻史にもちらりと視線をなげたい。

音声は仮名表記で済ますべく努めるが、やむなく簡略な音声記号を用いることがある。言及対象について、音を星印（\*）で記したり、太字で書いたりすることがある。紀年は、本文では元号により、括弧書きではキリスト暦による横書きを用いる。

遠江の天ちう河

日本語音韻の本を繙くと、わたしのリリア体験に近いことがいろいろ見つかる。

例えば、江戸時代初め、スペイン語 *medias* がメリヤスとして、すなわち *𐄁* がリで、オランダ語 *dianna* がギヤマンの形、すなわち *𐄁* がギで日本語に入ったことがある。古代日本語にあった *𐄁* の音は、中世の畿内では一般に *〔di〕* の音に変わっていたと考えられている。そこで、右の二語の受容にあたって、*〔di〕* に近似の音を写すべく、一つはリが、一つはギが用いられたと解釈されている。もとより、この二語の受容は同時期ではないし、初めに受容した地域が異なることも考えなくてはならないが、明治期に英語の *padding* をプリン<sup>の</sup>形で受け入れたのも、メリヤスの同類である。

ギヤマンに関して新村出『外来語の話』の記述がある。

或地方の方言で磁石をギシヤクといつてゐた訛語を思ひ起さしめる。ギの音がヂになることは、東西共に広く行はれた音韻変化であるが、ヂを強く発音して逆にギにする例は、日本でも極めて稀である。(『新村出全

これは、わたしにはたいそう興味ぶかく感じられる。自分の食の記憶とことばが絡む一つの体験ゆえである。

秋田市で育ったわたしの忘れがたい食品に海藻「ぎばさ」がある。和名「ほんだわら」の俚言で、これに類似する語形は秋田県から新潟県にかけていろいろ行われる。「ぎばさ」以外の名があるとも知らずに成人したが、萬葉集を学ぶようになって、これが萬葉歌や正倉院文書に雅びな「なのりそ」の名でみえることを知った。しかも、漢名は「神馬藻」、歴史的仮名遣いは「じんばさう」。すると、秋田で食した懐かしいギバサは、ジンバサウの転だということになる。語頭音のジがギに変わったことなるわけである。

平安時代、菅原孝標女たかすけのむすめの『更科日記』、常陸から上京する途中、遠江国で病氣した著者が天竜川にさしかかったくだりの記述に、「いみじく苦しければ、天ちうといふ河のつらに、飯屋を作り設けたりければ」とある。ここには定家自筆本の表記に少し手を加えて掲げた、この「天ちう」は難解である。古典の注釈家は一般に注目しないこの川の名に深く踏みこんだ考察が、平凡社版『日本語の歴

史』1「民族のことばの誕生」(1963)にみえる。第四章のその記述を要約して掲げる。

「天ちう」の発音は〔tan tɕiu〕であろう。今日「天竜」と書かれる川の名は、当時〔tɕiniu〕と発音されただろう。天竜とかくと字面はみごとだが、これは漢語ではあるまい。都の知識人がテンリウと書いてないのだから。

テンヂウ、テンリウ、いずれにせよ、固有の日本語としては珍しい語形の川の名である。いずれが古い形か不明であるが、〔tɕi〕〔ɕi〕のあいだで交替が起こったのは、類音と捉えられたからであろう。

幸田文『こんなこと』のうちの「あとみよそわか」の一節、五歳の娘と父露伴とが庭で雑草を抜きながら話す場面をかいたくだりに、「お爺ちやんこ、にゐた、こゝにもゐた。」とある(岩波書店版『幸田文全集』第一巻 p.158)。このページには、この娘が、母である著者に伝えることばにも「お爺ちやま」とある。幸田文の表記なら「ぢ」、現代の一般的な表記なら「じ」で書かれる拍が、五歳の幼女の発音ではりて実現したのである。

金田一京助『国語音韻論』(1937)は日本語の音韻を鳥

瞰しうる便利な書物である。その「子音の同化」のうち、「完全同化」に「母音を隔つる同化」の項がある。そこには、大阪でジンリキ(人力)をリンリキということを受け、「後の子音が前の子音を同化した」のだとしている(D.152)。これには、類音であることも関わるのではなからうか。

向田邦子の随筆にいくたびか登場する鹿児島島の餅菓子「じゃんぼ」は、「両棒(りやんぼ)」が転じたのだという。『日本方言大辞典』の「音韻総覧」には、福岡・佐賀・鹿児島県のヂンゴ(林檎・ヂツパ(立派)、ヂン(鈴)、ヂシ(利子)、新潟県東頸城郡津川町のヂンゴ(林檎)、ハヂ(針)があがっている。語頭に多く出現することには理由があるが、ここではそこには踏みこまず、ヂ・リの交錯するさまを見ただけでとめておこう。

#### 幸水と豊水

ふだんのわたしは、ラジオ第一放送の「ここはふるさと旅するラジオ」を聞きながら昼食をとることが多い。今夏の八月二日は北海道の「ヒコナイ」からの放送であった。数回出てくるこの地名を自分は知らなかったので、食卓横

においてある地図帳の索引を引いても出てこない。不審に思つて聞いていると、番組の終り近くなつて、それがヒコナイではなくキコナイ（木古内）だと知るに至つた。キとヒの聞きまちがいだつたのである。

わたしが大学生生活を送つた金沢に本社をおく北陸鉄道の略称は「北鉄（ホクテツ）」であつた。が、これを「キタテツ」と呼ぶ学生がいた。石川県外からの学生だつたように思う。国有鉄道は一般に略称「国鉄（コクテツ）」と呼ばれた。コクテツと北陸鉄道の略称「ホクテツ」との違いは、語頭のkとhだけである。うっかりすると紛れやすいので、ホクをキタに言いかえたのだろう。

中華人民共和国が成立して七年後に国の言語政策によつて簡略化された漢字が多い。それは「簡体字」と呼ばれ、本来の形の文字は「繁体字」と呼ばれる。簡体と繁体、現代漢語の普通話（プートンホア）の発音は大きく異なる。ところが日本語の発音はカンタイとハンタイ、頭子音の差だけで紛らわしい。同文異言語間の当然のずれである。わたしは中国語の初級の教室で何回か迷うことがあつた。そこで、教室では繁体字を「正体字」と呼びかえることもあつたという。賢い配慮といふべきである。

本稿の材料を集めていた三月初め、外務大臣が在日外国人から政治献金を受けていたことが発覚した。三月四日十九時のラジオのニュースでは、外相がそれを返金したことが二回読まれた。動作主が明らかなので誤解される恐れはない文脈だが、献金が問題になつている報道の中では困つた表現である。ケンキンとヘンキンの差は、右の諸例と同じである。難しいことではない。漢語なら「返却」と言つてもいいし、和語で「返した」ということもできる。聴取者に対してもう少し細かな配慮がほしい、とわたしは思つた。

郵便局の「ふるさと小包」のカタログに、よく似た梨の写真と並べて掲載したページがある。長野県産の赤梨、品種名は「幸水」と「豊水」、ともに戦後うまれたが、この二種だけで全国の梨の生産高の三分の二を占めるといふ。それにしても、幸水に後れること十三年にして生まれた新品种に、あえて先輩と紛らわしい豊水と名づけた意図は何だつたのだろうか。コウスイとホウスイ、語形の差は、語頭の子音kとhだけで、聞こえの印象もたいそう近い。発送や取引の現場で紛れることはないのだろうか。

## 誉田のこと

去りし二月、宮内庁は、応神天皇陵とされる古墳の域内に研究者が足を踏み入れて簡単な調査をする許可を与えた。この天皇の和風のおくりなは誉田（ほむた）。誕生したとき腕に軛状の肉塊が生えていたので、軛の古語によってホムタと呼ばれた、と日本書紀にある。その表記にみえる「誉（ホム）」は「ほめる」の文語形「ほむ」による。この陵は、羽曳野市誉田の地にあり、地名「誉田」は今「コンダ」と呼ばれる。ホムタからホンダへの変化は、神田・富田の同類であるが、ホンダからコンダへの変化はいかにしておこり、いつからそう呼ばれるようになったのだろうか。歴史や地名の辞典にはそれについての記述がない。ここは日本語史学の出番だろう。

普通には漢字で書かれる地名の実際の読みは、仮名書きしたものによらなくては知ることが難しい。『羽曳野市史』の史料編を通覧してえた最も古い例は、寛永四年七月の「誉田八幡宮文書」のうち、道明寺村から差しだされた文書の宛先「御八幡様 御寺中様まいる」の右肩に「こんな」と仮名で書いたものであった（第五巻 p.370）。江戸時代初期、庶民にはこの形が広まっていたのだろう。

古典の索引類によってわずかに知りえた、江戸時代以前の例は閑吟集と太平記にある。浅野建二『閑吟集研究集成』（1968）に掲げられた閑吟集の本文は次のものである。

今から譽田まで、日がくれうかやまひ、かたはれ月は、よひのほぢぢや。 四

閑吟集の伝本はおおむね「こんた」で、彰考館本は「誉田」に「ほんだ」の振仮名がある。同集成は、「實隆公記」の大永七年（1528）九月五日条に「誉田天皇訓ホンタコンタ不審、愚存勘付之」があるという貴重な事実を紹介している。続群書類従完成会のそれを太平洋社版で見ると、本覚寺の某氏が實隆に尋ねたようである（598）。閑吟集の写本はおおむね大永八年卯月の書写本から発しているのので、實隆公記とほぼ同時期の記述で、「ほんだ」「こんだ」の両形が伝存して不思議はない。

一方、大平記が世に出たころ、誉田はホンダ・コンダイずれで読まれていたのだろうか。日本古典文学大系本は、慶長八年古活字本を底本にした校定本である。その巻第三十五の「誉田ノ城ヲ賣ントスル由」には、校注者の附した振仮名「コンダ」がある。その他の伝本はどうだろうか。わたし

が若干みることができた本のうちでは、伝来系統が最も正確な古写本とされる西源院本に「譽田」（巻第廿五）、「譽田城ヲ責ントスル由」（巻第三十五）、室町時代末期書写という義輝本の「譽田ノ城ヲ攻ントスル由」（巻第三十五）などがある。

興味ぶかいのは神田本の巻第三十五である。明治四十年の国書刊行会版によると、

和田楠渡邊ニも支ヘス金田ノ城ヲモセメズメ又金剛山ノおくへ引コもる (p.618)

として、「金田」の右に「譽」の傍書がある。「金田」はコンダの形を伝えるのだからが、傍書の「譽」がコン・ホインいづれのよみを含意したかはわからない。

こんな面倒なことをするのは、古典の本文を扱うには、音韻史への配慮が欠かせないと考えるからである。ここで、ハ行子音の歴史の絡む問題がそれである。すなわち、近畿圏の近代日本語では、古代の両唇音〔p〕から、広い母音を有するハ・ヘ・ホでは喉音〔h〕に変化した。中世はその過渡期にあたる。閑吟集はまさにその時期に編まれたが、大平記はそれより百五十年ほど早い。さて、校注者はどう対処すべきであろうか。

### 類音のひろがり

音声学の教科書には書かれていない意外な聞き誤りのおこることがある。

この国の立法府と行政府の言語感覚については、この連載の六「受診と聴取」の終りで言及した。十年前の中央省庁再編によって、大蔵省が解体されて「財務省」がうまれた。これを知ったとき、まずいな、とわたしは思った。財務省を外務省と聞き誤るに違いないからである。この二省の名の差は、語頭の子音〔p〕と〔q〕だけ。二つは破裂音と破裂音で調音点も離れているので、類音として論ぜられることはなかったように思う。だが、聞こえは意外に近いうえに、財務・外務ともに政治に関わる文脈に出現する。懸念したとおり、紛れることがよくおこっている。

同じことは十年前に別の話題でもあった。夕方の第一放送「ラジオ夕刊」という番組で、タンポポの分布に関する話題を取りあげたときのことである (2001.3.16)。某大学の助教授は、「在来種」「外来種」を頻繁に使って話した。番組の南キヤスターは、在来種については「日本に昔からある／本来の日本の／日本の」タンポポと言いかえ、外来

種のほうは「外国から入ってきた／西洋タンポポ」などといった。聴き誤りを恐れてしきりに言いかえたのだ。だが、その助教授は最後まで「在来」「外来」で通ず、頑固ともいいうほかない話しぶりであった。ここは、在来種を「固有種」に、あるいは外来種を「舶来種」に呼びかえるべきだったと思うが、この人はそこまで気が回らなかったのだろう。

沖縄県に駐留する米軍の基地をどこに移すかは、いつになつても頭の痛い問題である。それが大きな問題になった十六年前、成城大学短期大学部から文芸学部への編入学試験の際、国文学科の問題の一つは左記のものであった。

去りし十月十五日、日本放送協会のラジオのニュースで、沖縄県議会が「アメリカ軍普天間基地を県内へ移転することを可決した」と報じた。この表現が含む日本語文法の問題を中心に論評せよ。

「日本語文法の問題を中心に」としたのは、音声の問題は副次的だと考えたからである。

「県内へ」という表現は不親切である。「県内へ」は、「県外から」を含蓄する。ところが、この報道の意味は、「沖縄県内から沖縄県内へ」らしいのである。これは日本

語ではない。それなら、同一の地点・地域を意味する「で」を用いて、「沖縄県内で」とか「沖縄県の内部で」とすべきであろう。

この出題には、音声について考えさせる意図もあった。「県ナイ」と「県ガイ」は音の印象が近いからである。ガが鼻濁音で読まれると、聞きあやまりは当然おこるだろう。実際、現実にさまざまな場面であつた。「内」か「外」かの判断に迷った経験がある。右の報道で「県内へ」を「県内で」に変更しても、助詞「へ」の発音エと助詞「で」は、よほど注意しないと、意外に似た音として聞きとられる。結局、このニュースでは文章を根本から練り直すべきだった、とわたしは考える。

この基地問題が民主党鳩山内閣の命取りになったことは周知の事実である。これを報ずるラジオのニュースで、黒澤アナウンサーは「ケンガイへの移転」と、ガだけを非鼻濁音で強く読んだ(2009.11.7 正午)。「ナイ」と聴き誤られることを回避したのだろう。うれしい心配りである。

今年三月の東日本大震災は、福島第一原子力発電所の破損事故を誘発して憂慮すべき事態が生じた。そこには、報道機関が考えるべき日本語の問題も発生した。三月十三日

正午、ラジオのニュースは末田アナウンサーの担当であった。その本文に、「オクガイ、建物の外へ退避してください。」があった。これは、原稿にあった漢語「屋外」を、多分「屋内」と紛れることを恐れて、和語で言いかえたのだと思う。

末田アナウンサーには「十キロ圏ガイに退避してください。」もあった。これは、ガイを非鼻濁音で強く読んだのである。先の黒澤アナウンサーと同じ配慮である。前後の文脈を注意ぶかくきいていれば誤解されない内容であるが、聴取者に冷静さの求め難いときでもある。この報道におけるナイとガイの聞き誤りは命に関わることだけに、原稿を書く人は、アナウンサーの機転がなくても正確に伝わるように書く訓練をすべきである。

日本広告審査機構の広報誌『REPORT JARO』四百三十号(2010.11.10)をみると、「国内動向」の欄に対するものは、「国外動向」ならぬ「海外動向」である。結果として、「内」と「外」が音読みによって紛れることを避けえている。当然のことだけれど、日本は島国なのだから、こうした語の選択も可能であることを知るべきだろう。

## 雲林院の謎

以上、かれこれ書いてきたことは、じつは外堀を埋める作業であって、本当の敵は本丸、いな雲林院にあったのである。

「さいつころ雲林院の菩提講にまうで、侍りしかば」——  
たいていの日本人が高等学校の古典の時間に読む『大鏡』はこの記述で始まる。山城国愛宕郡、今の京都市北区紫野にあった雲林院に参詣した人々の前で練り広げられる、二人の翁おきなの昔語りという設定の書である。この寺の名は、かげろふ日記、源氏物語、今昔物語集ほかにもみえる。寺院名ゆえ漢字で書かれることが多く、実際にどう呼ばれていたかを明らかにすることは案外むずかしい。右にひいた『大鏡』は東松本の本文だが、蓬左文庫本には「うりん院」とあり、教科書など多くの校訂本ではこの形で読まれている。

古今和歌集では、これが詞書と作者名に六回みえる。久曾神昇きみそとじんひたか『古今和歌集成立論』によると、廿ほどのテキストでは約七割が「雲林院」、一割余が「うりんらん」「うりむらん」、残りは「うりうらん」「雲りうらん」「雲りん院」などである。その読みかたは、秋永一枝『古今和歌集

声点本の研究」によると、「うりんめんハ冷泉家ノよみくせ也 漢字ノ如クニ ウンリンキンと読ヘシ」(75番歌『古今私秘著』の聞き書き部分)、「うりんめん 漢字ニ書タル如ニハネテヨムヘシ」(77番歌 堯惠本古今集)などの注記もある。

下って『謡曲』の「雲林院」に、日本古典文学大系本は「うんりんいん」と振仮名してあり、現代の謡いかた、漢字に即した読みが採られている。天草本『平家物語』の巻第一にみる綴りはVrinjyn (ウンリンイン)、謡曲と同じ音形である。これは、原拠本のテキストの漢字表記どおりにローマ字転写したのだと思う。

この寺院名は地名に残った。地名辞典類によると、愛宕郡舟岡山の東にあつた寺院跡は、中世、「うちい・うちゑ・うちめん・宇治井」などとも書かれた。十五世紀半ば、宝徳三年三月七日の賀茂社領大宮郷地からみ帳(写)に、「うちい」居住の作人十名が記載されているという。鎌倉時代、同じ名の城が伊勢にもあつた。その遺称地、三重県芸濃町雲林院は今も「うじい」と呼ばれる。

寺院名としての雲林院なら少し事情が違うこともあるだろうが、日本語の地名一般として、六拍三音節の語「ウン

リンイン」はいかにも長い。しかも撥音が三つも含まれている。古代後期から中世にかけての日本語音韻史には難しい問題がいろいろある。そこを通らずに書くことには批判が免れたいが、ここはあえて近道を通ろうと思う。

先にみた古今集のテキストはいかに解釈すべきだろうか。日本語史の研究者ならまず考えるのは、中世多く見られるようになった音韻現象《連声れんしやう》であろう。だが、雲林院について連声がおこっていた形跡、すなわち「ウンニンニ」などの形が行われていたことを示す記述を、わたしは一つも見いだしていない。これは意外なことである。その背景を考えると、当面の「雲」の箇所についていえば、「ウン」の撥音は著しく弱化して「ウ雲林院」になっていたか、あるいは、前の拍に従属する形で「ウ雲林院」のように実現していたことを意味するのではないか。

リがジ・ヂと交替した事例は本稿でたくさん見てきた。雲林院のばあい、雲(ウン)のンの消滅あるいは弱化は、繰り返りがずに聞きまちがえられる契機として強くはたらいた。残る二つのンも弱化が進んで、いずれかの段階で消えた。わたしはそうに考えている。ウンリンキンがウヂイになったのは、さほど突飛な変化なのではあるまい。

いま、公的な機関の資料に、地名「雲林院」の読み方は「うんりんいん」とある。だが、京都の市民が実際にそう呼んでいるとは考え難いわたしは、六月十六日、京都市北区役所に赴いた。窓口で対応してくれた吏員は、公称の「うんりんいん」というだけで埒があかない。そこで、その町の食堂に入って昼食をとったついでに、店内にいる人たちにその質問を投げかけた。店のあるじと三人の客は異口同音に「うんりんいん」と答えてくれた。古典のテキストで落ちていたのは初めのンであるが、この町の人たちのあいだで落ちたのは、二つめのンであった。文字による回帰がおこっていたと思うが、それでも六拍は長すぎて、途中のンが落ちたのだろう。

(二千二十一年九月)

#### 前稿の訂正

前稿「接辞の陥穽」について次のように訂正します。

61 ページ下段あとから五行目の「強調」を「協調」に。

64 ページ上段六行目「平仮名でかく」を「平仮名でかく」として「に」に。

同八行目「原則を通す一徹さである」を「原則を通そ

うとする」に。

いずれも高島俊男さんのご指摘によるものです。